

令和 4 年 6 月 28 日現在

機関番号：33908
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2019～2021
 課題番号：19K00230
 研究課題名(和文) 奄美における芸能文化の メディア媒介的復興 と自尊意識再生の文化生産論的研究

研究課題名(英文) A cultural production theory study of "media-mediated reconstruction" and self-esteem regeneration of entertainment culture in Amami.

研究代表者
 加藤 晴明 (Kato, Haruhiro)
 中京大学・現代社会学部・教授

研究者番号：10177462
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)： 衰退しつつあった奄美の民俗芸能文化が、大会=メディアイベント化や録音メディア化、組織化、教室化などのメディア媒介的展開によって、創造的継承を遂げつつあることを、奄美島唄・ポピュラー音楽や余興文化活動の事例分析を通じて明らかにすることができた。これにより、文化創生のダイナミックな展開のプロセスとメカニズムが解明された。また、文化生産論に準拠して、「文化生産プロセス」や「創造的継承の3アリーナズ」「アリーナ移動図」などの一般的説明モデルを構築した。これにより、本研究テーマが目指していた文化のメディア学のために一般モデルを作成するという試みのある程度達成することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 従来の民俗文化研究が、文化を固形的伝承という基準で捉えてその変化をネガティブなものと捉えてきた。これに対して、本研究は、メディア媒介的展開という視点を導入することで、そうした変容をよりポジティブな創造的継承として捉えてきた。その文化創生のダイナミックな展開をより一般的なモデル構築へとつなげることで、文化のメディア学の可能性を提起してきた。こうした創造的継承のモデル化は、民俗文化研究をポピュラー文化研究と融合させるという学術的意義とともに、民俗文化の継承の考え方そのものに一石を投じ、伝承活動の在り方の可能性を開くという社会的意義を有している。

研究成果の概要(英文)： Amami's declining folk entertainment culture is achieving "creative succession" through "media-mediated development" such as tournament = media event, recording media, organization, and classroom. It could be clarified through case research and analysis of island songs, popular music and entertainment cultural activities. This elucidated the process and mechanism of "dynamic development of cultural creation". In addition, based on the theory of cultural production, we constructed general explanatory models such as "Cultural Production Processes", "3 Arenas of Creative Inheritance", and "Arena Movement Map". As a result, we were able to achieve to some extent the attempt to create a general model for the "media studies of culture" that this research theme aimed at.

研究分野：メディア学

キーワード：文化生産論 メディア 文化変容 奄美 奄美島唄 新民謡 民俗文化

1. 研究開始当初の背景

本研究は、奄美における芸能文化の今日的変容とそれに伴う人びとの自尊意識の醸成を主題にしている。奄美には、世界自然遺産に指定される(2021に指定)に足る固有の生物種だけではなく、独自の興味深い文化を伝承してきた。シマ唄に代表される芸能文化、長寿食として注目されている食文化、大島紡に代表されるクラフト文化などである。島唄などの芸能文化は従来の学問としては、主に民俗学・民族音楽・文化人類学などの領域からのみ研究されてきており、現代的な変容の視点からの研究は散発的なものに止まっていた。

さらにいえば、日本の文化研究は、民俗文化・芸能文化研究とポピュラー文化・メディア文化研究が、別個のものとして相互に交叉することがないまま縦割りに研究されてきた。この乖離を超えて、両者を結びつけるような研究が必要ではないかという問題意識を共有したことが研究の背景にある。

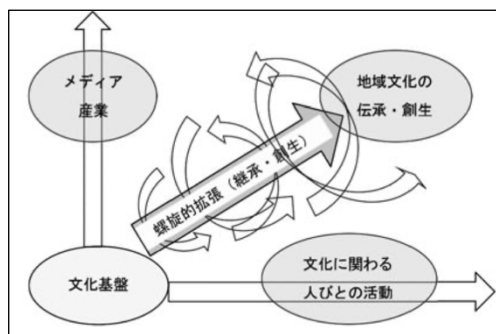
研究代表者である加藤清明(中京大学)の専門はメディア社会学であるが、その領域の研究においても、〈メディア・地域・文化〉を連環させるような研究は皆無に近い。文化的コンテクストを理解した上で、民俗文化・芸能文化のメディアを媒介にした現代的展開を描くことで、乖離した二つの文化研究を架橋する。いわば〈文化のメディア学〉のような研究が可能ではないか。これが本研究の背景にある「問い」である。

研究の対象は、奄美の文化である。その奄美の文化は、「伝統文化」として紹介されることが多い。しかしそれは固形的に伝承されてきたというよりも、島内の多様なメディア事業者による意図的な介入のもとで創造的に継承・発展してきている。そして、この場合のメディア事業者には、単に情報産業としてのマスコミ産業だけではなく、文化事業者・文化団体=組織・文化教室などひろい範囲で、意図的・制度的に文化を継承・発展させようとする主体群が含まれる。その意味では、かつての民俗文化・伝統文化も、今日では質的な変容を伴った一種の現代メディア文化としてある。それゆえ、現代における民俗文化の様態とその影響を考察するには、先述した〈メディア〉の視点が不可欠である。いわば、〈地域と文化とメディア〉を連環させる研究こそが求められている。

こうした〈地域と文化とメディア〉を連環させる研究の試みは、奄美に造詣の深い学問的背景の異なる三人の学際的な共同研究によってのみ可能になると考えられた。奄美のメディアと文化の近現代史を研究してきた研究代表者の加藤と、沖縄・奄美の芸能研究の第一人者である久万田晋(沖縄県立芸術大学)、奄美の民俗文化研究に長く関わり30年前の奄美と今日との比較が可能な文化人類学の川田牧人(成城大学)である。この3名が研究チームを組むことで、過去の古い文化の原型を研究ではなく、奄美文化の現代的な展開=〈メディア媒介的展開〉とそこに至るメカニズムを解き明かすことが可能となると考えられたのである。

2. 研究の目的

奄美群島では、かつて衰退傾向にあった芸能・民俗文化が、昨今、音楽産業やラジオ、新聞といったメディア産業と連環することである種の文化運動のような様相で復興しつつあり、さらにそれが島の人びとの自尊意識の再生とも結びついている。いわば〈自文化の自分化〉ともいえる文化の胎動である。a)このダイナミックで再帰的な文化創生のプロセスを時系列的に検証することが本研究の目的である。さらに実証・事例研究だけではなく、奄美の事例を通じて、b)芸能文化の現代的な復興の可能性に関わる一般的な理論モデルを構築することも目指している。大胆な言い方をすれば、メディア学・民俗学・人類学の知を接合させる、つまり〈地域・文化・メディア〉を連環させる〈文化のメディア学〉のような知の創生を目指している。



奄美は地域の伝統文化・民俗文化の宝庫である。本研究は、うた文化(島唄から新民謡・新歌謡、ポピュラー音楽まで)と余興文化(神事・宴席・余興イベントまで)に焦点を当てている。奄美のうた文化や余興文化は、レコード化、イベント化、コンテンツ化、ステージ化、ネット化などの〈メディア媒介的展開〉によって、今や新たな文化活動へと発展してきており、それが急増する観光客にとっての観光資源ともなりつつある。

ただ、研究では地域の文化創造的な運動を断片的に賞賛するのではなく、その文化的なコンテクストとしての古層としての民俗・芸能文化との連続性も重視している。過去から現在・未来へと続く時間幅をもったフレームが重要だからである。つまり本研究では、芸能文化・民俗文化の過去の固形的な姿を分類するのではなく、過去から現代へと変容・創造され続けるダイナミックなプロセスを解き明かすことを目指している。そしてその〈文化創造のプロセス〉を整理し、そこから文化発展の理論をモデル化する。

こうした研究目的のため本研究では、「文化の生成と発展のための「〈表出の螺旋〉モデル」と

いう仮説をたてた。文化基盤を起点にして、縦方向にメディア事業の展開、横方向に人びとの文化活動の裾野の拡がりがあり、縦軸と横軸を融合する右肩上がりのベクトル運動として文化が螺旋的に展開（継承・創生）する。それが地域文化の復興・創生につながっているという図（上図参照）になる

【具体的な研究目的(作業目的)】

- (1) 歴的経緯の整理=文化史年表の作成
- (2) 今日の奄美文化ルネサンスの相関図を描く。
- (3) うた文化産業のメカニズムの整理
- (4) 余興文化の背景と今日の展開の整理
- (5) 文化生成に関わる理論開発と適用可能性の模索

3. 研究の方法

研究は、資料収集と分析、文化イベントの取材、そして関係者へのインタビュー調査として展開した。初年度の2019年度は、奄美での現地調査・取材・インタビューを展開することができた。しかし、コロナ禍となった2020年度は現地入りすることができず、2021年度になってようやく奄美入りすることができた。そのため、2020年度と2021年度は、資料収集と音楽コンテンツや映像コンテンツの分析が中心とならざるをえなかった。

【島唄について】島唄の現代的展開にかかわる史料の収集。基本的に鹿児島県立奄美図書館収蔵の南海日日新聞(地元主要紙)のマイクロフィルム、及び奄美新聞(2008年以前は大島新聞)の紙面の検索と複写を実施した。戦後から今日までの島唄大会などの記事を時系列的に検索・収集した。島唄の組織(日本民謡協会奄美連合委員会)については、設立当初の広報資料を収集し、当時の事務局長への取材を実施した。

2020年度と2021年度はコロナ禍となり、現地調査に制約がかかった。しかし、かろうじて開催された島唄大会は逐次取材した。島唄関係者については、コロナ禍以前の2019年度に民謡協会の会長はじめ何人かにインタビュー調査をすることができた。

【音楽文化について】2019年度は、社会調査実習の学生を助手として現地のポピュラー音楽アーティスト3組に、それぞれ個別にインタビュー取材をすることができた。奄美のポピュラー音楽のCD・映像作品で入手可能なものは全て収集することができた。コロナ禍となった2020年度と2021年度は、CDに添付されているライナーノーツや、インターネットで展開されているアーティストの諸活動を検索・収集し、整理・分類・分析する方法をとった。とりわけ2020年度は、ネットコンテンツに依拠する調査となった。

【余興文化について】過去に島内開催された余興グランプリ(Y1グランプリ)の映像資料を全て収集した。またY1グランプリ開催の中心的担い手にインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

調査の方法でも述べたように、3年間の研究期間のうち、2020年度と2021年度はコロナ禍に遭遇し現地調査に大きな制約がかかった。このため、対面によるインタビュー調査が極めて困難となった。とりわけ高齢者への取材は、手紙などのやりとりに制約された。そうした中で、収集した資料(含:音声コンテンツ・映像コンテンツなど)の解読などに偏らざるを得ない面があった。当初想定した研究作業の沿った成果は以下のようである。

【うたの文化史の研究成果】

うた文化を中心に、戦前から今日に至る奄美のうた文化の年表作成をおこない一通りの作表作業を終えた。「うたの文化史」「人物史」「社会・メディア史」の3項目を設け、1899年(明治32年)から現在に至るまでを年次ごとに追って作表した。加藤が自著として発行予定の『奄美島唄の文化メディア学(仮)』に収録予定である。

【うた文化の〈メディア媒介的展開〉の研究成果:組織編】

本研究では、奄美の民俗文化のなかでも島唄をとりあげ、その〈メディア媒介的展開〉として、教室化(+楽譜化)、組織化、大会化、録音メディア化に焦点をあてた(表参照)。そのうち、教室化は本研究以前の研究で解明しており、今回は、組織化・大会化の文化生産のメカニズムを詳細に解き明かして論考として発表した。奄美島唄は、とかく「神秘」や「古代歌掛け文化の残滓」が強調され、ともすれば崇高なものとして語られがちである。しかし、本研究では、文化は人びとの意図的な営みのなかで生産されるという視点から、表で示したような幾つかの要素に分けてその生産のメカニズムを解明することを試みてきた。こうした文化生産論的な研究視点に基づくことで、島唄を過度に神秘化することや、「島唄の本質論とは何か」とい難題から脱することが可能となるからである。

【表:奄美島唄の文化生産の制度化(社会的事業化)】

社会変容	個別事業	相互関係
文化生産 (社会的事業化)	大会化	組織化・教室化と連動している。
	録音メディア化	大会化・産業化と連動している。
	産業化	録音メディア化・大会化と連動している。
	組織化	大会化と連動している。
	教室化	大会化・楽譜化と連動している。
	楽譜化	教室化と連動している。

教室化は本研究以前の研究で解明しており、今回は、組織化・大会化の文化生産のメカニズムを詳細に解き明かして論考として発表した。奄美島唄は、とかく「神秘」や「古代歌掛け文化の残滓」が強調され、ともすれば崇高なものとして語られがちである。しかし、本研究では、文化は人びとの意図的な営みのなかで生産されるという視点から、表で示したような幾つかの要素に分けてその生産のメカニズムを解明することを試みてきた。こうした文化生産論的な研究視点に基づくことで、島唄を過度に神秘化することや、「島唄の本質論とは何か」とい難題から脱することが可能となるからである。

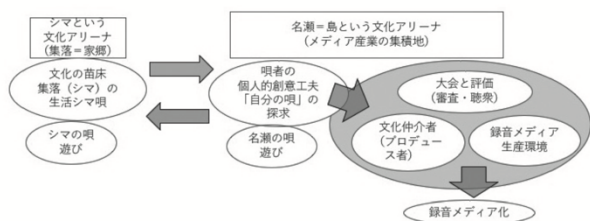
組織化のメカニズムは、日本民謡協会奄美支部・現奄美連合委員会の発足の経緯を詳細に跡づ

けた。具体的には、1995年の「シマ唄かたりゆん会」の発足から始まり、連合委員会として制度化されていく数年間の過程を、会の目的や開催イベントなどを会の内部資料をもとに詳細に時系列化して作表した。奄美島唄の研究では、従来地元主要紙である南海日日新聞社主催の「奄美民謡大賞」にのみ焦点が当てられてきたが、もうひとつの大会であり、全国大会への登竜門となる日本民謡協会奄美連合委員会主催の春の「奄美シマ唄日本一大会」と秋の「奄美島唄連合大会」のメカニズムと意義を解明した初めての研究となった。これにより、民俗文化の現代的継承の成功モデルとされる背景の一旦を解明することができた。(加藤晴明「奄美島唄という文化生産：組織化をめぐる」『中京大学現代社会学部紀要』第13巻第1号)

【うた文化の〈メディア媒介的展開〉の研究成果：大会編①坪山豊論】

文化生産論の理論を使い、有名唄者と大会の関係を解き明かした。まず今日の奄美島唄の原点の一つともなっている坪山豊の島唄と彼のデビュー大会の関係について自伝や坪山出演のテレビ番組、地元新聞でのシンポジウム記録などを素材にして詳細な論考にまとめた。奄美島唄には「なつかしや」という評価軸がある。しかし、それはかつてのシマ=農村共同体の娯楽であった歌掛け遊び=〈生活島唄〉のなかに本質的にあり、それが大会で表現されたということではない。

【図：島唄をめぐる文化生産プロセス】



「なつかしや」なテイストは大会を通じて、発見・発明・増幅されることで島唄の特性となってきた。そうした「なつかしや」なテイストを強調する〈叙情化〉の転機に坪山豊の唄者としてのデビューである(坪山ターン)。このデフォルメされた〈叙情化〉は最初から島唄に備わっていたというよりも、坪山が40歳を過ぎて自分の島唄を〈創意工夫〉するなかで創造的に増幅された特性であり、その契機が「実況録音島唄大会」であった。つまり、全島的に有名な唄者がいて、その島唄が評

価・模倣されていくという単純なストーリーではなく、大会が有名唄者を生み出し、有名唄者になることで自身の島唄が一層の創造がなされていく。研究では、こうした現代島唄=叙情島唄が文化生産されていくプロセスに、空間移動=アリーナ移動の視点を導入した。文化アリーナやアリーナ移動という視点は、これまでほとんど強調されてこなかった視点である。研究では産業が集積する奄美市名瀬という文化アリーナの重要性を強調した。名瀬アリーナで文化生産される島唄は、シマ唄=集落唄=〈生活島唄〉ではなく、全島の聴衆に受け入れられる「汎シマ唄」=〈メディア島唄〉である。つまりシマ唄は、〈メディア島唄〉となることで、創造的継承の成功モデルとなったのである。(「奄美島唄という文化生産：大会化をめぐる試論①-坪山豊の島唄と〈叙情化〉-」『中京大学現代社会学部紀要』第15巻第1号)

【うた文化の〈メディア媒介的展開〉の研究成果：大会編①武下和平論】

続いて、「百年に一人の唄者」「天才唄者」と謳われた武下和平についても、彼の有名唄者としての確立と島唄大会の関係を解き明かした。とりわけ、地元音楽産業によるメディア・プロデュースの重要性や、彼の島唄もまた農村共同体の〈生活島唄〉ではなく、都市に移動してからの島唄アリーナのなかで切磋琢磨することで工夫され創造された島唄であることを明らかにした。自伝やこれまでの先行研究、プロデュースした山田米三の書いたライナーノーツなどを参照にしながら、奄美島唄に革命をもたらし、全島的に圧倒的な影響力をもった武下島唄の文化生産プロセスを再構成した。

表：奄美島唄の〈創造的継承〉の3アリーナ

シマ・アリーナ	マチ・アリーナ	ミヤコ・アリーナ
シマ (集落)	名瀬	全国 (東京)
シマ唄	マチ唄	ミヤコ唄
シマ唄	島唄	島歌
シマ唄	汎シマ唄	汎島唄
生活島唄	メディア島唄①	メディア島唄②
歌掛け遊び	歌掛け遊び	-
-	文化生産の制度 (地方)	文化生産の制度 (全国)
-	音楽産業	音楽産業
-	マスメディア	マスメディア
-	研究者・知識層	研究者・知識層
教室	教室	教室
・・多数・・	武下和平・坪山豊 築地俊造	朝崎郁恵 里アンナ

※複数の奄美島唄がある。その分類表である。
 ※シマと名瀬の間に、古仁屋が入るが、表をシンプルにするために、あえて3アリーナに凝縮させた。
 ※シマ唄・マチ唄・ミヤコ唄という言い方は、奄美郷土史研究家の森本眞一郎氏の発案である。

唄者の島唄は、奄美島唄研究家の山田米三のフィルターを通じて〈創意工夫〉がなされ独自の島唄として創造されていった。その山田のフィルターとなっている昇曙夢の島唄観についてもとりあげた。

ただ重要なのは、坪山の場合にも、武下の場合にも、生まれ育ったシマの暮らしとの対話があることである。「なつかしや」は、シマの暮らし=故郷イメージとしてあり、それがそれぞれの唄者の想像の準拠点として作動することで新しい島唄が創造される。

こうした文化生産のプロセスの中でも、改めてアリーナ移動ということが重要な意味をもってくる。シマ・アリーナから、マチ・アリーナへが移動の第1段階である。武

下の場合には、基本ははこの第1段階の移動の枠内にある。ただの唄者の中には、さらに全国的な聴衆を意識したり、ワールドミュージックとして世界市場への発信を試みる唄者も

いる。そうした展開ミヤコ・アリーナとした。(加藤晴明「奄美島唄という文化生産：大会化をめぐる試論②・武下和平論」『中京大学現代社会学部紀要』第15巻第2号)

残された課題は、奄美島唄は、すでにシマ(集落)出身者だけではなく、マチ(名瀬)出身の若手唄者によっても担われてきている。今後、マチ出身の若手唄者たちがどのように島唄を継承していくのか、世代継承の問題は、今回の文化生産論の研究では明らかにすることが出来ていない。この世代継承の問題は、同じメンバーによる2022年度からの新たな科学研究(基盤(C))で解き明かしたい。

【奄美のうた文化のメカニズム研究の成果】

今回の研究では奄美島唄の文化生産プロセスが中心的な作業となったが、「うたの島」としてのひろがりについても、一定の成果をあげることができた。奄美島唄とも関係の深い2人の音楽アーティスト、そしてポピュラー音楽の若手アーティストへの取材を通じて、さらに奄美のポピュラー音楽活動のある一定の部分(発売されているコンテンツが中心)を調べ、『奄美音楽図鑑①』・『奄美音楽図鑑②』としてまとめた。(2019年度研究、2020年度研究、中京大学加藤晴明研究室『社会調査実習報告書』)。また、図鑑の中に、最近の音楽イベント・音楽関係の記事の時系列的なリストも作成し公開した。この10年間ほどの奄美の音楽活動のひろがりがあるリストとなっている。

【余興文化の背景と今日的展開研究の成果】

奄美にはうたの文化とともに、身体表現の文化の一翼として余興笑芸の文化があり、最近ではイベント=「Y-1グランプリ」として結実してきた。この余興文化については、コロナ禍のなかで現地調査が十分には展開できなかったが、中心的な担い手の活躍を軸に予備的考察を論考にまとめることができた「Y-1グランプリ」の過去の大会やその背景としての、ライブハウスの開業や余興漫談ユニット「サーモン&ガーリック」の登場、さらに「夜ネヤ島ンチュリスペクチュ」の開催などの背景といった〈自文化の自分化〉活動の出来事史も整理した。とかく島唄のみが注目される奄美の文化を、余興文化・笑芸という視点からアプローチする研究はこれまで皆無であり、最初の貴重な論考となった(川田牧人「ワンが一番の笑い」『日本民俗文化紀要』第36輯、川田牧人「島事をプロデュースする-音楽と余興による島おこし-」『環境資源にみられるグローバル現象の動態』)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 川田牧人	4. 巻 第36輯
2. 論文標題 ワンが一番の笑い -奄美の余興笑芸に関する予備的考察-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本常民文化紀要	6. 最初と最後の頁 71-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川田牧人	4. 巻 なし
2. 論文標題 島事をプロデュースする -音楽と余興による島おこし-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩田一正（編）「環境資源」にみられるグローバル現象の動態	6. 最初と最後の頁 31-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久万田 晋	4. 巻 32号
2. 論文標題 沖縄臼太鼓旋律のリズム分析試論 -奄美大島八月踊り旋律と比較して-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 沖縄芸術の科学	6. 最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久万田 晋	4. 巻 Vol.4
2. 論文標題 「冬休み」沖縄の民謡と民俗芸能をより深く知るための15冊	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 沖芸の先生による、今読むべきこの15冊	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久万田 晋	4. 巻 2021.2
2. 論文標題 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り-奄美大島の八月踊り-男女の歌掛けと太鼓の響き-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 e-magazine LLATINA	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤晴明研究室	4. 巻 Vol.24
2. 論文標題 奄美音楽図鑑	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 メディア文化研究	6. 最初と最後の頁 1-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤晴明	4. 巻 13
2. 論文標題 奄美島唄という文化生産：組織化をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 119-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤晴明	4. 巻 23
2. 論文標題 書評『エイサー物語-移動する人、伝播する芸能』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ポピュラー音楽研究	6. 最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久万田晋	4. 巻 32
2. 論文標題 沖縄白太鼓旋律のリズム分析試論-奄美大島八月踊り旋律と比較して-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 沖縄芸術の科学	6. 最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計4件

1. 著者名 川田牧人・白川千尋・飯田卓(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 470
3. 書名 現代世界の呪術	

1. 著者名 川田牧人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 512
3. 書名 パブリックヒストリー入門-開かれた歴史学への挑戦-	

1. 著者名 川田牧人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 291
3. 書名 「人新世」時代の文化人類学	

1. 著者名 川田牧人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 832
3. 書名 東南アジア文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	久万田 晋 (Kumada Susumu) (30215024)	沖縄県立芸術大学・芸術文化研究所・教授 (28001)	
研究分担者	川田 牧人 (Kawada Maki to) (30260110)	成城大学・文芸学部・教授 (32630)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------